

芦安の地に来た名取将監

しやうげん

名取将監長信は、武田信虎の家臣として、幾たびかの戦場において戦功をたて、信虎に直接進言できるほどの地位にまで上がった武将です。

妻は、武田民部少輔信安の娘といわれ、前途も明るいものがありました。

永正年間に信虎は、甲斐の内紛や、反抗する分子を押さえて領内を統一します。その後、信濃の海の口に信



観音経西随道より御野立所白根三山を望む

濃攻略の基地を築き、戦国大名として大きく前進しました。このころから、信虎は慢心して、傲慢な振る舞い

が多く、家臣のひんしゆくをかうようになります。将監もまたこれを見るにつけ、心を込めて苦言を呈しましたが、信虎の機嫌を損じ、ついに武田家を去ることになったのです。

それから、中山道のある宿駅に落ち着きました。しかし、血のつながらもあり、近郷にも名の聞こえていた郷土、名取弾正左衛門を頼って今の芦安地区大曾利に居を定めてこの村の住人になりました。

元来が武人であった将監は、山の仕事など知りません。日ごろから手馴れている弓矢を携えて、山野に鳥獣を狩つて生業としました。

ある日、野呂川入りの山中に入った将監は、「鹿を逐う獵師、山を見ず」のたとえ通り、大鹿を追ってアザミ沢の溪谷深くに入ってしまった。

見事に射止めたものの、谷は深く、

断崖絶壁、あたりの山谷から狼の遠吠えも聞こえてきます。この山中に、一夜を明かすことになってしまいました。ときおり、得体の知れない亡霊の出現にも驚かされましたが、日ごろから、深く信仰している観音経を一心に唱え続けて救われました。今の野呂川林道、御野立所まえの溪谷を観音経溪谷と呼ぶようになったのはこのためです。

名取将監は、大曾利窪区の山際に、多賀明神を祀つて、村の繁栄と家内安全を祈り守り神としました。

他にも津島牛頭天王を祀り、疫病に悩まされた人々の心を静め、旧暦6月15日には疫病退散を願い、祇園祭を行いました。

名取将監は、文献などにあまり出てこない謎の多い人物です。しかし、芦安地区の誇りとして、祭りや信仰、諸行事は名取将監と関連付けて語



—芦安の民話より—

り継がれてきました。芦安地区大曾利にある妙定寺周辺は殿屋敷と呼ばれ、名執将監の住居跡と伝えられています。

名取将監の墓は、大曾利大宝寺墓地の中央に苔むした石祠としてあります。

今回は旧芦安村教育委員会が平成15年2月に発行した冊子、「夜叉神峠(第二版) 芦安の民話」から今でも地元に残る民話を紹介しました。